

よみがえれ! 海岸林

Vol.10

東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト10ヵ年計画」を、元日経新聞論説委員の小林省太がさまざまな角度でお伝えします。



左／海岸林の歴史を伝える愛林碑は津波に流されずにみつかった(2011年8月)
右／初めての種まき。海岸林再生への確かな一步である(2012年3月30日)

海岸林再生プロジェクトの肝の一つは、苗木の供給から海岸への植えつけ、その先の管理までを一貫してやってしまおうという点にある。そんな話は何度も書いた。しかも、苗木づくりは地元の人々を雇って進めるという計画。今回と次回は、育苗のためにつくられた「名取市海岸林再生の会」の話を――。



昭和十一年玉浦漁業漁港整備に当り農地を没収された北釜部落組合は台林国有林約五十ヘクタールの所属權を受け当時の後代森良三氏を組合長とする北釜開墾耕作組合を組織し、耕作地を保護する。然し被災された国有林のみにては數千ヘクタールに及ぶ名取耕作地を漁港より保護するには若干の不安を感じたので昭和二十一年漁防備林の補助金を山台管林署に申請したところ、公認性を認められ十二年計画の下に養生地帯を盛土工事を施し防潮林造成することになった。この工事実績に当っては北釜部落組合員も積極的に協力し昭和三十三年十月にして今日の完成を見る。松泥の侵入により殆どの立木が枯死し全くの死林地化したものである。それを伐採しては盛土植栽するの外ならぬ作業であったが年々風水害と海水浸透力と組合員の歓喜努力な作業を必要としたのである。依ってこの工事過程を記録し組合員一致協力して保護育成に努めその目的を達成すべく茲に組合員の総意により碑を建立し記念するものである。

東日本大震災から5カ月たった2011（平成23）年8月、石碑がかつてと同じ場所のアシ原の中にあるのを高梨さん（70／年齢は現在、以下同じ）がみつけた。「愛林」と名づけられた碑には、この地の海岸林が戦前から戦後にかけてたどった歴史が記されている。裏面に刻まれた名前のなかに高梨さんの父、北釜共用林野組合で役員を務めていた武さんがいる。武さんは菅林署の委嘱を受け、盆栽や門松にしようとやつてくる松泥棒の監視もしていた。

宮城県名取市の北釜地区に住む10歳の高梨仁少年は父に連れられ、海岸部につくられた石碑の除幕式に出かけた。辺りを駆け回って遊び、お祝いの席で飲み食いした記憶がいま残っている。

東日本大震災建物に倒壊した

りを駆け回って遊び、お祝いの席で飲み食いした記憶がいま残っている。

東日本大震災から5カ月たった2011（平成23）年8月、石碑がかつてと同じ場所のアシ原の中にあるのを高梨

名づけられた碑には、この地の海岸林が戦前から戦後にかけたどった歴史が記されている。裏面に刻まれた名前のなかに高梨さんの父、北釜共用林野組合で役員を務めていた武さんがいる。武さんは菅林署の委嘱を受け、盆栽や門

松にようとやつてくる松泥棒の監視もしていた。

東日本大震災から5カ月たった2011（平成23）年8月、石碑がかつてと同じ場所のアシ原の中にあるのを高梨

名づけられた碑には、この地の海岸林が戦前から戦後にかけたどった歴史が記されている。裏面に刻まれた名前のなかに高梨さんの父、北釜共用林野組合で役員を務めていた武さんがいる。武さんは菅林署の委嘱を受け、盆栽や門

松にようとやつてくる松泥棒の監視もしていた。

1959（昭和34）年3月、宮城県名取市の北釜地区に住む10歳の高梨仁少年は父に連れられ、海岸部につくられた石碑の除幕式に出かけた。辺りを駆け回って遊び、お祝いの席で飲み食いした記憶がいま残っている。

東日本大震災から5カ月たった2011（平成23）年8月、石碑がかつてと同じ場所のアシ原の中にあるのを高梨

名づけられた碑には、この地の海岸林が戦前から戦後にかけたどった歴史が記されている。裏面に刻まれた名前のなかに高梨さんの父、北釜共用林野組合で役員を務めていた武さんがいる。武さんは菅林署の委嘱を受け、盆栽や門

松にようとやつてくる松泥棒の監視もしていた。

東日本大震災から5カ月たった2011（平成23）年8月、石碑がかつてと同じ場所のアシ原の中にあるのを高梨

名づけられた碑には、この地の海岸林が戦前から戦後にかけたどった歴史が記されている。裏面に刻まれた名前のなかに高梨さんの父、北釜共用林野組合で役員を務めていた武さんがいる。武さんは菅林署の委嘱を受け、盆栽や門

松にようとやつてくる松泥棒の監視もしていた。

人は、場所は、お金は、技術は……

海岸林が防風や防砂、防潮に役立ついただけでなく、ガスが普及するまでは燃料の供給源だったことにはすでに触れた。さらに、松林は地元に収入をもたらしてもいた。

高梨武さんのような場合だけではなく、女性は昼の農作業のあと夜は自宅でよしずを編んでいた。松子植え」と呼ばれた苗の植えつけもアルバイトだ。海岸の飛砂を防ぐ柵づくりである。「松子植え」と呼ばれた苗の植えつけもアルバイトだ。

海岸の飛砂を防ぐ柵づくりである。「松子植え」と呼ばれた苗の植えつけもアルバイトだ。

オイスカが考案した海岸林再生は「被災農家を雇用し、その技術を生かして苗木を生産する」ことからスタートする。プロジェクトは、かつてあった海岸林と地元の関係を再現しようとするものでもあった。ただ、「言うは易し」である。実際に苗をつくるのに何が必要なのか。場所は、人は、お金は、タネは、そして技術は……。やらなければならないことは山ほどあった。

苗をつくる地元の人々の集まりが「名取市海岸林再生の会」である。



上／宮城県内の種苗家を視察。左端が太田清蔵さん(2011年9月29日)
下／3月に90歳になる太田さんは今も現役の種苗家だ(2020年1月、宮城県蔵王町)



第1育苗場に用意された肥料(2012年2月25日)
育苗場を二つに分ける話し合い(2011年12月6日)

これなら自分たちにもできる

太田さんとは、知り合いでもあつた。

太田さんと、

苗木にするタネはすべて種苗組合を通じて組合員に配られる仕組みだ。再生の会もメンバーが県の講習を受けた。苗組合に加盟する手続きをとつた。そうした「新規参入者」に太田さんははじめ種苗家が協力的だったことが、技術を身につけるうえでも役に立つた。一方では、海岸林再生に必要なクロマツの苗は、既存の業者だけでもまかなえる量でもなかつたのである。

9月に種苗家を訪ねて実際のクロマツの苗畑などを视察。野菜が専門の被災農家の森清さん（65）は「これなら自分たちにもできる」という感触を得る。11月には再生の会のための苗畑用地が見つかった。海からの距離は約1・4km。

まったく知られないなかでオイスカの面々が5月以降しばしば名取を訪れ、呼応して現地にプロジェクトに対する理解や共感、さらには「一緒にやってやろう」という気運が少しづつ生まれてくる経緯は、これまで書いてきた。人の輪が北釜地区の被災農家から広がっていくのは、学校の同級生や師弟関係、そして町内会など近所づきあいを通してである。面積100ha、苗木50万本、資金10億円。その規模に最初は度肝を抜かれた人々も、やると決めたら多くの人を巻き込まないと大変だと考え、周辺に声をかけて回った。

再生の会をつくるにあたって会長に就いたのは鈴木英二さん（78）。地元中学の理科教師だったので教え子が多く、苗木をつくるにあたって頼んだところは、北釜の出身で、7月にオイスカが東京で開いたシンポジウムでも地元代表として登壇していた。「自然に私が会長をやるものと周りも思つたんですね。知らないうちが会長に立たされていた」。生に先頭に立たれていた。

鈴木が北釜地区の被災農家から広がっていくのは、学校の同級生や師弟関係、そして町内会など近所づきあいを通してである。面積100ha、苗木50万本、資金10億円。その規模に最初は度肝を抜かれた人々も、やると決めたら多くの人を巻き込まないと大変だと考え、周辺に声をかけて回った。

再生の会をつくるにあたって会長に就いたのは鈴木英二さん（78）。地元中学の理科教師だったので教え子が多く、苗木をつくるにあたって頼んだところは、北釜の出身で、7月にオイスカが東京で開いたシンポジウムでも地元代表として登壇していた。「自然に私が会長をやるものと周りも思つたんですね。知らないうちが会長に立たれていた」。生に先頭に立たれていた。

鈴木が北釜地区の被災農家から広がっていくのは、学校の同級生や師弟関係、そして町内会など近所づきあいを通してである。面積100ha、苗木50万本、資金10億円。その規模に最初は度肝を抜かれた人々も、やると決めたら多くの人を巻き込まないと大変だと考え、周辺に声をかけて回った。

鈴木が北釜地区の被災農家から広がっていくのは、学校の同級生や師弟関係、そして町内会など近所づきあいを通してである。面積100ha、苗木50万本、資金10億円。その規模に最初は度肝を抜かれた人々も、やると決めたら多くの人を巻き込まないと大変だと考え、周辺に声をかけて回った。

に合うよう冬の間に肥料をすき込んだ。

苗つくりに水は欠かせない。細い井戸を8本掘って調べると、5本は塩分が濃すぎた。

比較的塩分濃度が低く使えそうな3本を残し、あとは埋め直した。

以上が「第1育苗場」。オイスカの出先や再生の会の事務所に使うプレハブも建てられ、後にボランティア活動の拠点にもなる場所である。

一方「北釜耕人会」という組織をつくって名取市内のずっと山側、高館地区に農地を借りて葉物野菜づくりを再開していた高梨さん、櫻井重夫さん(69)、森さんの3家族

は、第1育苗場は遠すぎるのではなくにも苗畑がほしいと考えた。北釜は海岸に近く平らで土壤は砂質だが、高館は傾斜があり粘土質。勝手が違い、本業が試行錯誤のただ中にあつた。マツの苗はつくるけれど、第1育苗場まで片道20分ほどの時間のロスをなくしたいと考えたのである。

この話に、目が届かないし機材も二重に必要で効率も悪いと、佐々木さんは乗り気でなかった。ただ、本業を犠牲にして苗つくりをする必要はないとも考えていたし、苗木づくりで野菜に匹敵する収入があげられるわけでもない。

第1育苗場は多少手狭でもあ

よみがえり! 海岸林



水をまき(写真①)、乾燥と寒さを防ぐために菰をかけ(②)、さらに寒冷紗で覆う(③)。午後3時ごろ、一連の共同作業を終えた再生の会のメンバーがプレハブの事務所で車座になった。酒席である。農村では、田植えが終わつた、稲刈りが終わつたなどなど、区切り区切りには酒盛りがついた。震災から1年余り。久しぶりに高揚感があった。「一曲、いいんでねえすかや。たわらづみ聞きたいねえ」。そんな声

に押されて、高梨さんが「南部俵積み唄」を、続いて櫻井勝征さん(77)が「さんざ時雨」を歌う。いずれもおめでたい震災後は聞くことがなかつた。集つた顔に涙がこぼれた。人の輪、人の心も再生されていた。

ところが、その後2週間ほどで発芽するはずが、いつもでも芽が出ない。タネが腐つたか。のつけから失敗か。不安が佐々木さんら再生の会を襲つた。はじめての発芽確認は4月28日。播種から29日後である。のちに、第

1育苗場は太田さんの苗畑と氣象条件が異なり地温の上がり方が遅いことがわかつた。翌年に播種を1カ月ほど遅らせると、予定通り発芽した。頭に殻をつけて出てきた芽(写真①)は、やがて殻を捨て去り(②)、横に広がっていく(③)。被災農家の人々もクロマツの赤ちゃんは見たことがない。うまいことを言う人がいた。「みんなで万歳しているみたいだ」

震災から10年の来年。あらたな石碑が名取の海岸に建たれることになつてている。



上／種苗組合の太田組合長(左)から、再生の会の櫻井重夫副会長にタネが渡された(2012年3月9日)
左／抵抗性クロマツのタネ。500gで2万2500粒ほどになる

つた。耕人会の強い求めで、苗づくりは2カ所で始まることになった。

ここで、オイスカと再生の会の関係に触れておこう。オイスカには海外の事業も含め「地元にやる気のないところでやつてはいけない」という教えがあった」と吉田俊通海

岸林担当部長(50)は言う。

だから名取でも説明を尽くしてオイスカ傘下にあるのではなく、種苗と啓発普及について

「オイスカと業務委託契約を結ぶ別団体なのである。

地元の人々が海岸林再生に主導的にかかわり、成果の還元も受ける、オイスカはその活動を応援するという形になつているわけだ。メンバーは

再生の会に雇用され、会から給与をもらう。その分、会には経理や労務などさまざまな仕事も必要になつていつた。

再生の会の正式な設立は翌2012(平成24)年2月29日。オイスカが当初から目指していた震災の翌年に苗木生産を始める計画は、軌道に乗ることになつた。会員はざつと30人。人が集まれば時にぶつかり合いがあり、不満も出

る。仲良しグループでもない限りそれが当たり前で、再生の会もそうした組織の宿命と無縁ではなかつた。それは次回に書くことにして、苗づくりの動きを追うことにする。

マツのタネには、マツクイムシに抵抗性のあるものとそ

りの動きを追うこととする。

震災後の需要の爆發でタネは不足、初年度に種苗組合から再生の会に割り当てられた抵抗性は500g。必要な量の約四分の一で、あとは普通種はだつた。ただ、この普通種は精英樹と呼ばれる特別育ちのいい母樹からとつたタネ。いま海岸で4~5mにまで成長している若木は、このタネの8年後の姿なのである。



上／播種を前に酒を供え成功を祈念する(2012年3月30日)
下／このタネがいまは4~5mにまで成長している(2012年3月30日)

みんなで
万歳している

土壤の改良や防風用ネットの設置、畠づくりなど育苗場の準備が整い、ベテラン種苗家の知恵も借りながら、第1育苗場で種まきが行われたのは3月30日。太田さんは3月中に播種するようアドバイスがあった。タネは1m四方に700粒ずつ、畑にじかにまいていく。コンテナといわれる容器のなかにまくようになるのは翌年からだ。



☆次回は5月号に再生の会の続編を書く予定です



〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL(03)3322-5161 FAX(03)3324-7111
E-mail:kaiganrin@oisca.org

■海岸林再生プロジェクトホームページ
<http://www.oisca.org/kaiganrin/>

ブログは毎日更新中!

オイスカ 海岸林

検索

プロジェクトへのご支援・ご協力お願いします!

- 郵便局から(お名前・ご住所・電話番号などを払込取扱票に明記してください)
口座記号・番号……00100-6-482316
- 加入者名……海岸林再生募金
- 銀行から(お名前・ご住所・電話番号などは別途下記にお知らせください)
銀行名……三菱UFJ銀行 永福町支店(支店番号347)
口座……普通 0054080
名義……公益財団法人オイスカ(コウエキザイダンホウジンオイスカ)